

5年 「想像力のスイッチを入れよう」～「習得」編～

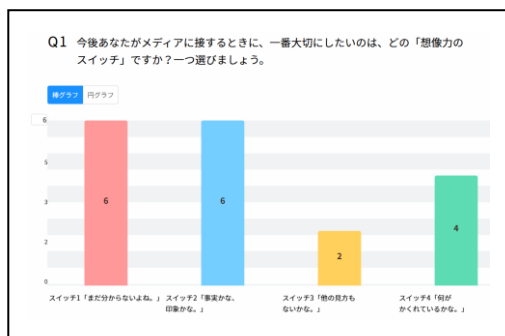
5年生 説明文「想像力のスイッチを入れよう」では、事例と意見の関係を押さえて読み、考えたことを伝え合う力を育てることをねらいとしました。単元では、「想像力」についてもともと自分がもっていた考えから出発し、筆者の下村さんの考えを読み取った後、池上彰さんのメディアに対する考えに触れ、さらに友だちの考えを受けて考え直すというように、段階的に思考が深まっていく構成を意図して単元を組み立てました。

学習の導入では、教科書の挿絵を用いて想像する体験を行い、その後、「想像力」についてははじめの考えを共有しました。子どもたちからは、「見えないところを考えること」や「予想すること」などの考えが挙げられ、想像力を自分の言葉で捉えようとする姿が見られました。



次に、説明文を読み深める学習に取り組みました。文章全体を序論・本論・結論の三つの大きなまとまりに分け、本論については内容ごとにさらに小さなまとまりに整理しました。1・2学期に学習してきた説明文の構成を振り返り、説明文の型を意識することで、子どもたちは見通しをもってスムーズに読み進めることができました。

さらに、考えを伝えるための筆者の工夫について考えました。「想像力のスイッチはいくつあるかな」「一番納得したスイッチはどれか」と問いを設定することで、筆者の考えと事例との関係や、事例どうしの関係に目を向けさせました。加えて、「納得感の少ない事例はいらないのではないか」「複数の事例を挙げることの良さ



は何か」と問いかけることで、事例どうしのつながりや、複数の事例を示すことの効果について考えることができました。子どもたちからは、「想像力のスイッチどうしはつながっている。だからどれも必要だと思う」という意見が出されました。さらに、「想像力のスイッチは想像する順番になっていて、この順番で考えることで想像がどんどん深

まっているように感じる」という声も聞かれ、事例の内容だけでなく、その並び方や順序にも意味があることに気付く子どもが現れました。また、本論の最後に書かれている内容とその意図についても考えました。本論の最後には、想像力のスイッチを使わないと起こることが示されており、読み手に対する警告的な内容になっています。ここで「この内容は必要だろうか」と問いを投げかけることで、これは筆者が自分たちに『想像力のスイッチを使ってね』と直接語りかけている部分であると捉えることができました。その流れを生かし、筆者の考えを踏まえたうえで、自分の考えをまとめて書く活動へとスムーズにつなげることができました。